

KUNST ARZT では、昨年に引き続き 6 度目となる山里奈津実の個展を開催します。山里奈津実は、金を用いた表現の研究と実践をベースに、光や命を表現する日本画アーティストです。本展は、「人体が発する光」を意味する造語「Bio+Photon」と題し、あらゆる生命体が発光しているという事実を踏まえ、主に輝く絹を基底材とし、剣鉾や金碧画の箔あしをモチーフにした掛軸を中心に展示する予定です。

(KUNST ARZT 岡本光博)



Negative capability

制作年：2022

素材：絹本着色 弁柄、兎膠、アルギン酸

コンセプト：

曖昧さを受容する力は、知識の多さや手の器用さ、地位や名誉などから逸脱した、ひとの根源的で大切な力のように思えます。

「なんでもいい」のではなく、多方面の視点を「受容すること」自分が理解しやすいようにと物事をカテゴリ化して決めつけないこと。

わかっているけれど私にとっては非常に難しく、成熟の道はなかなか遠いのです。

各人の強い信念は、自分を奮い立たせ生きる活力となります。

各人の尊い信仰心は、世界を穏やかに優しく強くさせます。しかし、いずれもそれ以外を許さない状態（思考）となった瞬間に、それは暴力となり得ます。

詩人のジョン・キーツが「ネガティブ・ケイパビリティ」を表明した一番はじめとされる 1817 年 12 月 21 日曜日付け弟へ宛てた手紙の一文を掛け軸に仕立てました。原文ではなく、川村泉さんが日本語訳し昭和 22 年に養徳叢書から出版された『感覚より思索へ』からの抜粋です。普遍的な表現を心がけているのに、完全に日本語のわかる人にしか伝わらない作品となってしまいましたが、はたと自分自身が「皆、曖昧さを受容すべきだ」と強めの思考になっていることに気づき自分の矛盾に怯える、という日々を繰り返すなかで、この作品は私が自分の矛盾を認識するために必要な作品であるため日本語としています。

## 経歴

1990 年茨城県生まれ

2018 年 京都造形芸術大学大学院修了 博士（芸術）

2017 年 公益財団法人佐藤国際文化育英財団 第 27 期奨学生

2015 年 日本文化芸術財団 第 20 回奨学生

2014 年 京都新聞 掲載

(10 月 5 日「社殿絵図、

京都造形芸大院生「緊張」の模写 離宮八幡宮)」

2013 年 「離宮八幡宮絵図」現状模写 奉納（離宮八幡宮／京都）

## 個展

2022 年 「軸と線」(KUNST ARZT / 京都)

2021 年 「8」(KUNST ARZT / 京都)

2020 年 「Cu29+Zn30」(KUNST ARZT / 京都)

2019 年 「Uterus Hysteria (\*)」(KUNST ARZT)

\*タイトルは正式にはギリシャ語表記

2018 年 「false pregnancy」(KUNST ARZT)

## グループ展

2021 年 「美術ヴァギナ」 KUNST ARZT

2018 年 第 27 回奨学生美術展（佐藤美術館／東京）

2018 年 画心展 Selection Vol15（佐藤美術館／東京）

2018 年 博士課程学位申請作品展（Galerie Aube / 京都）

2023 年 10 月 24 日（火）から 29 日（日）

12:00 から 18:00

会 場：KUNST ARZT

605-0033 京都市東山区夷町 155-7 2F

問い合わせ



KUNST ARZT 代表 岡本光博

090-9697-3786

kunstarzt@gmail.com

アーティスト・ステートメント

私は「自分が今住む世界に対する好奇心」を金という素材を介して表現している。

古来、聖なるものを描くときに用いられる金の目的は「光」だった。

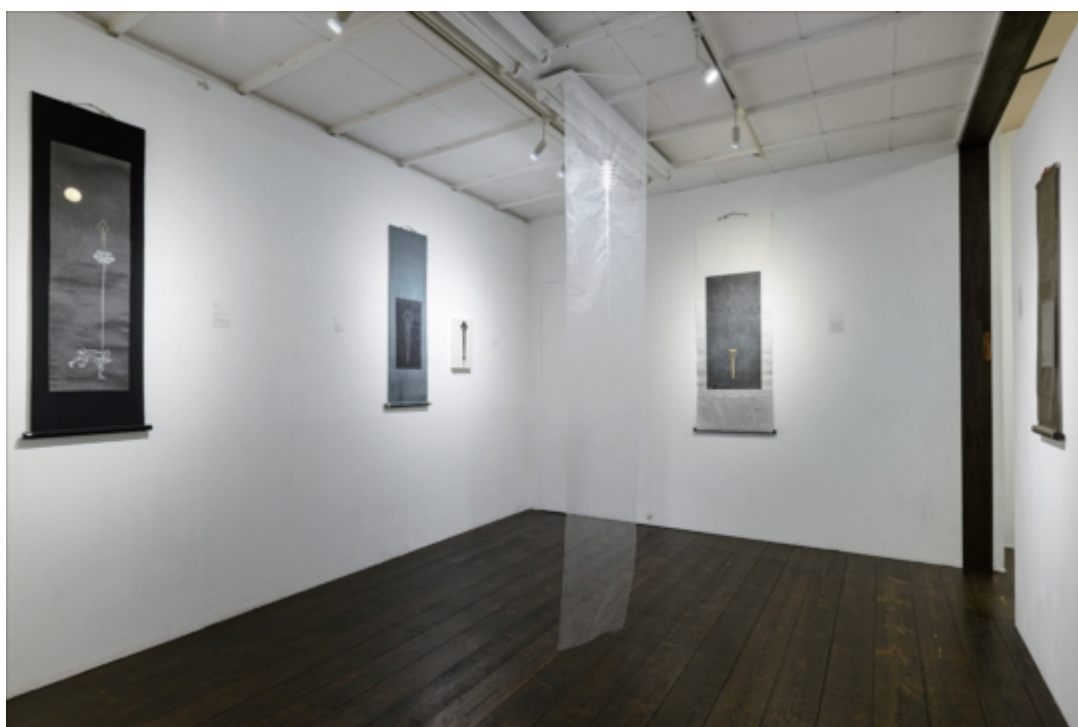
2016年、卵子は受精の瞬間にたった一度だけ光る（亜鉛のスパークが生じる）と科学誌Scientific Reportsにて発表された。

私たちは、姿形が形成される一番初めのその瞬間に光る。

人間は、科学が発達するもっと前から、生命誕生の瞬間には光が常に存在していたことを無意識に気付いていて、輝く素材である金が絵画に長く用いられてきたことと、どこかでつながっているのではないだろうか、と根拠のないことを考えている。



個展「軸と線」（2022）展示風景



個展「8」（2021）展示風景